慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	稲生若水撰『詩経小識』の伝本調査 (二)
Sub Title	A bibliographical research on manuscripts of Shikyoshoshiki (2)
Author	矢島, 明希子(Yajima, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2023
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.57 (2022.) ,p.363- 404
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20220000-0363

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稲生若水撰『詩経小識』の伝本調査（二）

矢島　明希子

はじめに

稲生若水（一六五五－一七一五）は、『庶物類纂』の編纂や『本草綱目』の校訂で知られた江戸時代中期の本草学者である。若水の学問は名物学的な性格が色濃く、新井白石に依頼されて著した『詩経小識』は、江戸時代に数多く著された詩経名物書の嚆矢であった。[1] 本書は写本でしか伝わっていないが、今も比較的多くの伝本が残されている。しかし、必ずしも十分に整理されているとは言いがたく、そのため、筆者は国内に伝存している諸本を調査し、本書の伝本整理を行うこととした。本稿では、前稿で検討できなかった残りの伝本について紹介し、[2] 前稿で紹介した分と合わせて整理を行う。

一．これまでの整理状況

前稿で検討したのは次の二十二件である。

1．京都大学附属図書館　若水遺稿　二一－イ一－貴
　〔江戸中期〕写（自筆）　雨森良意家旧蔵
2．同　谷村文庫　六－二一－シ一（A）
　文政三年（一八二〇）写　内山氏・金子家旧蔵
3．同　谷村文庫　六－二一－シ二（B）

文政六年（一八二三）写（春水）

4. 京都大学人文科学研究所　一二三・三－I－二八九
〔江戸中期〕写　田安家旧蔵

5. 国立国会図書館　八四六－八（A）
〔江戸後期〕写

6. 同　特七－三七一（B）
天明八年（一七八八）写（寄合書）　関松窓校訂識語
伊藤篤太郎旧蔵

7. 同　二〇六－二三（C）
享和二年（一八〇二）写（桃花園）　榊原芳野旧蔵

8. 同　特一－二九〇（D）
文化六年（一八〇九）写（服部氏）　白井光太郎旧蔵

9. 同　特一－二〇六〇（E）
〔江戸後期〕写　白井光太郎旧蔵

10. 国立公文書館　内閣文庫　一九六－一二六
〔江戸後期〕写　和学講談所旧蔵

11. 東洋文庫　岩崎文庫　三－C－一二
〔江戸後期〕写　安西雲煙旧蔵

12. 都立中央図書館　河田文庫　一二一－KW－七〇
〔江戸後期〕写（温故齋）　河田烈旧蔵

13. 慶應義塾図書館　CL－A四－二九
〔江戸後期〕写　東敬治旧蔵

14. 岩瀬文庫　二四－六〇
寛政六年（一七九四）写（〔山本〕封山）

15. 内藤記念くすり博物館　四六二〇二（A）
〔江戸後期〕写　中野康章旧蔵

16. 同　四八三〇三（B）
〔江戸後期〕写　富岡謙蔵・中野康章旧蔵

17. 研医会図書館
文化九年（一八一二）写（米関陳人）　文化十四年（一八一七）書写者校注書入

18. 東京大学附属総合図書館　B六〇－六八〇（A）
寛政三年（一七九一）写（谷懋）　渡辺信旧蔵

19. 同　B六〇－二四六七（B）
〔江戸後期〕写　河野通之旧蔵

以上の十九件は原本調査を行い、次の三件はマイクロフィルムによって閲覧した。

20. 陽明文庫　シ－二五（斯道文庫所蔵マイクロフィルムA一九九二B）
〔江戸中期〕写（〔近衛家熙〕）

21. 東北大学附属図書館　狩野文庫　二－一七八〇－一（東北大学附属図書館狩野文庫マイロ版集成・BDH－〇〇一、丸善）
狩野亨吉旧蔵

22. 多和文庫（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム二七一－四二－三）
江戸中期写　寛保二年（一七四二）王崧維嶽校閲

前稿では、以上の伝本の大枠を把握するために京都大学附属図書館所蔵若水遺稿本を基準に据え、序跋の構成や項目そのものの脱落、引用の増減、順序などを比較し、異同を整理した。前稿の繰り返しになるが、整理状況についてもう一度概略述べることとする。各項目に付した番号および引書の構成は末尾の【表】を参照されたい。

前稿の時点でまとまりが見えているのは次の二群である。

ア．京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本
イ．京大人文研・国会B・同C・同D・都立中央本

まず、ア群では、すべての伝本で次の異同が見られる。

・「藍」（2－18）の項目が脱落。
・「鷸」（4－33）の厳粲詩緝の「四足之美有」から後ろを欠き、改行せずそのまま次の毛晋広要の冒頭「厳氏詩緝引」に接続する。
・「鳴鳩」（4－27）と「流離」（8－1）の引書名「詩經集傳」を「詩經集註」に作る。

この三点を核として、特に京大谷村A・同谷村B・岩瀬・東大B本は、「楊」（3－36）と「條」（3－37）の二項目を「梅」（3－38）の後ろに配し、「舊本」と順序が異なることを注記するなど共有点が多い。さらに京大谷村A・同谷村B・岩瀬本は書写年代が明確であり、岩瀬本の書写者である山本封山（一七四二－一八一三）、あるいは封山が開いた山本読書室周辺で書写されたのではないかと推測した。[3]

次にイ群の共通点は、本来巻二の末尾に配されるべき「來牟」

（2－28）以下四項目を巻一の末尾に配す点である。イ群の中でもとりわけ京大人文研・国会C・都立中央本は、「螽斯」（7－1）の項目表記を「螽」のみとする点や、巻八の尾題が巻尾だけでなく、その後の附録と跋文の間に重複して現れる点でも共通しており、近い関係にあったことがうかがわれる。

この他の伝本についていえば、国会E本と内閣文庫本はそれぞれ錯簡のある底本に基づくようで、内容が乱れている。また、上記のア群やイ群の各本ほど強い共通性はないものの、一部の異同を共有する伝本も見られる。例えば東洋文庫本は、「蕙」（1－61）の毛伝の引書名を欠く点でア群の一部と共通し、「螽斯」をただ「螽」と表記する点ではイ群とも共通している。そして、比較の基準とした若水遺稿本もまた、「櫟」（3－39）の孔穎達疏を欠くという独自の特徴を持つ伝本であることを、ここで指摘しておかねばならない。

以上、前稿までの整理状況について述べた。本稿では次の十五件を検討する。なお、国立公文書館所蔵の『詩経小識補』も本書に準ずる一本として最後に附した。

23. 杏雨書屋　杏三六三〇（A）
24. 同　杏五二八三（B）
25. 同　杏五二八四（C）
26. 京都大学農学研究科生物資源経済学専攻司書室　和－五四七〇－三
27. 東京大学理学図書館　Wa－六一－八
28. 富山大学医薬学図書館特殊資料室　K三六二、三六三
29. 島根大学附属図書館　九二一・三二－I五五－三
30. 筑波大学附属図書館　林文庫　ロ八二〇－三六
31. 茨城大学附属図書館　菅文庫　一八－四
32. 新潟大学附属図書館　佐野文庫　八三－一一
33. 大阪府立中之島図書館　甲和三四六
34. 県立長野図書館　四九九－一一七
35. 佐賀県立図書館　鍋島家文庫　鍋九九一－九五
36. 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫　一二三・三－ト四三－一（A）
37. 同　一二三・三－ト四四－一（B）

【附】詩経小識補（国立公文書館　内閣文庫　一九六－一二五）

二、『詩経小識』の諸伝本

本稿では新たに十五の伝本と本書を増補した『詩経小識補』について紹介する。各本の解説は、前稿同様以下の標目の順で記した（有しない場合は省略）。

①表紙・外題、②副葉子など、③序・目録、④本文巻首・張数、⑤体式、⑥尾題、⑦附録・跋文、⑧識語・奥書、⑨書入・印記、⑩備考・異同

なお、⑩の異同は、京大若水遺稿本との比較である。遺稿本の収録項目は末尾【表】を参照されたい。また、複数の伝本に共通する異同については重複を避け、⑩では各伝本固有の異同に限ることとした。共通する異同については後述する。各本の番号は前稿からの通し番号とした。

○杏雨書屋

23．杏三六三〇（A）

詩經小識八卷　　**和半一冊**

稲〔生〕若水撰

延享四年（一七四七）寫（福主）　内藤耻叟舊藏

①香色表紙（二十四・四×十六・七糎）、左肩打付にて「〈稲若水著〉／詩經小識　全」と墨書。康熙綴。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低三格）草属略第一／荇／（以下低一格）不聞俗名／荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上根」、概ね引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全六十六張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉十二行二十二字、字面高さ約十八・八糎。

⑦巻八後、改張して宝永六年若水跋、続けて附録「羅木」あり。

⑧附録後、改張して識語「〈予〉嘗欲觀此書久矣頃乞津嶋某先生而繕写／名品盡審寄語具備傍辨論諸注家之説明／如見火矣鳴呼夫子嘗称詩多識鳥獸艸木之名／然我東方不同之者遂不能審名品焉／延享四丁卯歳夏六月／［　］福主識」墨書（本文同筆）。

⑨書入：間々朱筆にて俗名に読み仮名あり（稀に墨筆）。書写識語と同張の裏に「新井白石之侍讀於文昭公嘗寄書稲〈生〉若水問毛詩／草木名状若水加賀人名宣義字彰信本草学／乃作

此書以答〈□〉若水又奉國主命著庶物類纂一／千卷皆手寫終之不使他人代書白石嘗称年末傳／強仕著一千卷書古今未嘗有也如此書□其續餘／所成也云　明治二十年五月　大学教師内藤耻叟識」と墨書。印記：冊首に陽刻「□□／□保」墨印記、陽刻円形「内藤／耻叟」朱印記、陽刻楕円形「松村文庫」紫印記（明治三十五年三月十二日、No.三三〇）あり。

⑩福主は未詳。識語の「津嶋某先生」は、松岡玄達に学んだ本草学者・津島如蘭（恒之進、一七〇一－一七七五）か。玄達は若水の弟子であり、津島如蘭だとすれば、若水の弟子筋に近い伝本と言えるかもしれない。

内藤耻叟（一八二七－一九〇三）は明治の漢学者・歴史学者。水戸藩弘道館で藤田東湖等に師事。その後水戸藩を出て明治十九年には帝国大学教授となった。

「蔞」（1－6）の江陰県志冒頭の「蒿」を項名として掲出。「蘋」（1－10）の嘉祐補註本草をさらに一格低す。「萑葦」（1－59）の「葦」を「草」に、「瓜瓞」（2－20）の「瓞」の「失」を「告」に、「桃」（3－1）の俗名「貌々」を「貌」のみに、「唐棣」（3－6）の邵武府志を「郡武府志」に作る。「黄鳥」（4－2）の鄭夾漈爾雅註の引書名、「鴈」（4－8）の項名、「鶉」（4－11）の項目を欠く。「獫歇驕」（5－20）の項名を「獫」のみに、「魚」（5－24）の項名および引用文の「魚」を「莫」に、「鱮」（6－5）の項名を「鮽」に、「熠燿」（7－14）の項名を「熠」のみに作る。

24・杏五二八三（B）

詩經小識八巻　　**和大二冊（合一冊）**

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫

①後補黄檗色表紙（二十六・八×十八・九糎）、左肩に紙箋を貼付し「詩經小識〈自壹至／八　完〉」と墨書。もと二冊を一冊に合冊。後補襯紙あり。

④「詩經小識巻之一／（低二格）草屬第一／苻／（以下低一格）不聞俗名／苻一名接余白荃葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全七十一張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉十二行二十字、字面高さ約二十・八糎。

⑦巻八後、接行して宝永六年若水跋、続けて附録「羅木」あり。

⑨書入：巻四眉上に本文同筆の朱筆にて補注（漢籍引用、「先生按…」、「先生曰…」）、墨筆にて間々俗名に読み仮名を付す。

「蔞」（1－6）の江陰県志の「陰」を「隠」に作る。「葭」（1－13）の項名の下に典拠の詩句および篇名を記す。「苴」（1－66）の毛伝の引書名を欠く。「鳩」（4－4）の二つ目の詩経説約の「後人必」より後ろを欠く。「雎」（4－21）の爾雅疏の冒頭「佳鳩」を項名の位置に掲出。「隼」（4－24）に「漢書注師古曰…」と注を増補。「象」（5－13）の「此方未有」および「虎」（5－16）の「本邦未有此獸」を欠く。「赤豹」（5－33）の「豹」を「貓」に、「魴魚」（6－1）の「魴」を「魴」に、「鱣」（6－2）を「鱧」に作る。「龜」（6－13）から「鯈」（6－16）までを欠き、紙箋を貼付し「鼈ノ次ニ／亀貝鼈鯈／ヲ欠ク」と注記。

25・杏五二八四（C）

詩経小識八巻（闕巻一至三）　和半一冊

稲生若水撰

〔江戸後期〕寫

①後補縹色蜀江錦空押表紙（二十三・二×十六・三糎）、左肩に紙箋を貼付し「〈稲生若水手稿〉／詩經小識〈巻四〉」と墨書。裏打修補。

④「詩経小識巻四／（低二格）羽屬畧第四／（擡一格）○雎鳩／（以下低一格）俗名密作哥／雎鳩王雎鵰類今江東呼之為鶚好在江諸山邊」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全四十四丁張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉九行二十字、字面高さ約十八・五糎。

⑦巻八後、改張して宝永六年若水跋、さらに改張して附録「羅木」あり。

⑨書入：まれに本文同筆と思われる墨筆にて「修按…」、「修曰…」の評語あり。俗名に読み仮名を付す。紙箋に識語「詩經小識巻四　寫半一冊／稲生若水著。手稿。／（低一格）○巻末に寶永六年十月初五日、稲義謹識／の跋あり。／昭和九年五月　東京、井上」ペン書。[4] 大阪府立図書館所蔵本の目録と跋文末尾の写真付帯。

⑩巻一から巻三を欠く。「鵲」（4－3）・「鱈」（6－8）・「蒼蠅」（7－6）の項名を欠く。

○京都大学農学研究科生物資源経済学専攻司書室

26・和－五四七〇－三

詩經小識八卷　　**和大三冊**

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫　種德堂舊藏

①後補香色雲母引表紙（二十六・五×十九・四糎）、第一冊のみ左肩に子持枠題簽を貼付し「詩經小識初稿　〈全〉」と墨書（原題簽か）、全張裏打修補。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低二格）草屬畧第一／荇／（以下底一格）不聞俗名／荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き〈第一冊〉三十三張、〈第二冊〉三十六張、〈第三冊〉二十五張、楷行書体、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉十行二十一字、字面高さ約二十二・五糎。

⑦巻八後、改張して附録「羅木」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑨書入：まれに朱墨校注あり。印記：第一冊首に方形陽刻「種德／堂記」朱印記あり。[5]

⑩題簽に「全」とあることから、もともと一冊だった本を三冊に分冊したものと考えられる。

○東京大学理学図書館

27・Wa－六一－八

詩経小識八卷　　**和大二冊**

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫　柳窓・武田信賢舊藏

①縹色表紙（二十七・一×十九・〇糎）、左肩に子持枠題簽を貼付し「詩経小識［　］乾（坤）」と墨書。

③「詩経小識初稿目録」

④「詩経小識卷一／（低二格）草屬畧第一／荇／（低二格）不聞俗名／（隔三行、以下低一格）荇一名接余面莖（「白莖」と校改）葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き〈第一冊〉五十五張、〈第二冊〉四十張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉十行二十字、字面高さ約二十三・二糎。

⑦巻八後、改張して附録「羅木」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑨書入：誤字多く、間々本文とは別筆の墨あるいは淡墨にて校

改（「イ」本と校合）、巻一は間々俗名と漢籍引用との間に間隔あり。俗名に読み仮名を付す。巻一末尾「果贏」（1－69）の後に「來牟」（2－28）以下四項目を記した別紙を貼付（本文とは別筆、校注と同筆）、同じ別筆にて第一冊末尾に「詩經小識巻之三終」、附録後に「詩經小識巻八終」と墨書、大尾に「栁窗藏」と墨書（校注等と同筆か）。印記：第一冊首および第二冊尾に長方形陽刻「武田氏／藏書印」朱印記、毎冊尾に長方形陽刻隷書「尾張人／武田信賢／寄贈書」朱印記、見返しに大正十五年十二月一日武田氏寄贈印あり。

⑩武田信賢（一八四八－一九二七）は号酔霞堂。農学を修め、晩年は諸事考証を好んだ。[6] 理学部図書館には、武田信賢写とされる松岡玄達『竹品』（Wa－五七－一、二）などの写本が所蔵されており、この分野への関心の高さをうかがわせる。「龍」（1－37）の本草図経の引書名を本草綱目に校訂。「菽」（1－63）の汀洲府志を「汀洲府誌」に作る。「竹」（3－17）の毛詩集解を「毛詩集緝」に作る。「燕」（4－6）の陳漠子秘伝花鏡を「陳漢秘傳説鏡」に作る。

○富山大学医薬学図書館特殊資料室

28．K三六二、三六三

詩經小識　　**和半一冊**

〔稲生若水〕撰

〔江戸後期〕寫

①浅葱色表紙（二十二・五×十六・八糎）、左肩打付にて「詩經小識［　］乾（坤）」と墨書。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識巻一／（低二格）草屬略第一／荇／（以下低一格）不聞俗名／荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き〈第一冊：巻三「駁」まで〉五十張、〈第二冊：巻三「杞」から〉四十七張、一筆か。

⑤無辺無界、毎半葉十行二十字、字面高さ約十八・五糎。

⑥大尾に「詩經小識」と大書（外題と同筆）。

⑦巻八後、接行して若水跋（年記・署名を欠く）、改張して附録「羅木」あり。

⑨書入：朱筆にて校注あり、墨筆にて俗名に読み仮名を付す。「棘」（3－9）に補注あり。第一冊後見返しに「杏林園」と

墨書。印記：毎冊首に長方形陽刻「潮留岡／氏藏書」朱印記（墨消し）、方形陰刻「岡五／安印」朱印記（墨消し）、巻一首および第二冊首に長方形陽刻「□亭文庫」朱印記（朱消し）。

⑩「梅」（3－38）を「梅」に作る。3－38の「梅」は、3－4のウメとは異なりクスノキに似た樹木を指すと考えられている。[7]「梅」とすれば香木の梅檀に同定されるが、[8]現行の『詩経』でこの字を用いる詩句を寡聞にして知らない。[9] 3－4の「梅」と区別するためか。[10]

○島根大学附属図書館

29・九二一・三二－I五五－三

詩經小識八卷　　和半三冊

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫

①布目地菊花繋文空押艶出表紙（二十三・三×十六・七糎）、左肩に打付墨書にて「詩經小識　〈上（中・下）〉」、縹色角裂あり。

④「詩經小識卷一／（低二格）草属畧第一／荇（隔二格）不聞俗名／（以下低一格）荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸」、引書ごとに改行。墨付き〈第一冊〉三十六張、〈第二冊〉三十八張、〈第三冊〉二十五張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉十行十六字、字面高さ約十九・〇糎。

⑦巻八後、同張の裏から宝永六年若水跋、続けて附録「羅木」あり。

⑨書入：まれに本文同筆の墨校注あり。

⑩「白茅」（1－12）の下辺四文字から五文字分を欠く。底本に汚損があったものと想像される。「葑」（1－15）の項名を欠く。「鶞」（1－54）の爾雅註を「晋郭璞尓雅疏」に、「著」の留青日札の「留」を「雷」に作る。「菫」（2－21）の項名を「莖」に作り（本文は「菫」）、詩経説約の「農夫以茶則」より後ろ「言美悪」の前まで二行分を欠く（空白）。「鴈」（4－8）の項名を「鷹」に作る（本文は「鴈」）。「皐螽」（7－3）の按語の下辺六字から四字分を欠く。「蜩」（7－9）の宋鄭夾漈昆虫草木略の「青紅二色者盡無」より後ろ引書名の「木畧」の前まで三行分を欠く（空白）。

○筑波大学附属図書館

30・林文庫　ロ八二〇－三六

詩經小識八巻　　**和半二冊**

稲〔生〕若水撰

寛政四年（一七九二）寫（龍珠舘等寄合書）　寺内直助・林泰輔舊藏

①布目地横刷毛目表紙（二十二・八×十六・三糎）、左肩子持枠題簽を貼付し「詩經小識〈新井君美閲／稲　若水著〉〈乾（坤）〉」と墨書。天地截断。

③「詩經小識初稿目録」（第二冊の首にあり）

④「詩經小識巻一／（低二格）草屬略第一／荇（隔二格）不聞俗名／（以下底一格）荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、概ね引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き〈第一冊〉四十八張、〈第二冊〉三十六張。第一冊は概ね一筆、第二冊の目録から第五張表八行目までは別筆、その他は第一冊と同筆か。

⑤無辺無界、毎半葉十行二十字、字面高さ約十八・五糎。

⑥「詩經小識巻幾」、附録後さらに「詩經小識巻八終」

⑦巻八尾題後、改張して附録「羅木」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑧大尾に「寛政四年二月［　］龍珠舘藏」と墨書（本文第一冊と同筆）。

⑨書入：句点あり。本文同筆にて間々俗名に読み仮名を付し、その下に俗名・和名を補記[11]、眉上あるいは付箋を貼付して校注・補注あり。第一冊後ろ見返しに「寺内直助義方」、第二冊後ろ見返しに「寺内直助」と墨書。印記：毎冊首に方形陰刻「寺内／氏藏」朱印記、長方形陽刻楷書「林文庫」朱印記、大正十一年十二月二十三日林直敬寄贈印あり。首冊に長方形陽刻「北總林氏藏」朱印記あり。

⑩該本は目録が第二冊首に綴じられており錯綴が疑われるが、目録と第二冊冒頭が同筆のため、該本が書写された当初よりこの場所に綴じられていた可能性も考えられる。該本の奥書に見える「龍珠舘」は、前稿で取り上げた国会C本（二〇六－二三、享和二年写）の墨刷罫紙の版心にも見える。これについては後述する。

寺内直助は未詳[12]。林文庫は林泰輔（一八五四－一九二二）の旧蔵書のうち、日本漢学に関する書物を中心とし、日本で書写刊行されたものがほとんどであるという[13]。

「木瓜」（3－20）および「舜」（3－26）の致富全書を「致富奇書」に作る。

○茨城大学附属図書館

31・菅文庫　一八－四

詩経小識八巻（闕巻三）　和大一冊

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫　菅政友舊藏

①布目地横刷毛目表紙（二十六・六×十九・三糎）、左肩打付淡墨にて「詩経小識」、虫損あり。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩経小識巻一／（低一格）草属畧第一／（低一格）○苻／不聞俗名／苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」、引書ごとに改行、項名は冒頭数張のみ「○」を冠すが、以降は「○」を欠き二格低す、按語は一格低す。墨付き全七十二張、一筆か。

⑤無辺無界、毎半葉十行二十字、字面高さ約二十一・二糎。

⑦巻八後、改張して附録「羅木」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑨書入：間々俗名に読み仮名を付す。

⑩菅文庫は菅政友（一八二四－一八九七）の旧蔵書。菅政友は水戸の生まれで、父は水戸の町医者であった。安政五年（一八五八）彰考館に入り、『大日本史』編纂に従事、太政官修史館に勤務した後、帝国大学書記などを務めている。

「白茅」（1－12）の本草図経の引書名を欠く。「唐」（1－22）の明顧夢麟詩経説約の「顧」を「碩」に作る。「薁」（1－61）の毛伝、「芹」（2－16）および「緑」（2－17）の項名を欠く。「鬯」（2－27）の昆虫草木略の「木」を「不」に、「鵙」（4－18）の毛詩鳥獸草木考の「木」を「本」に作る。「鰷」（6－16）の本草綱目の引書名、「螽斯」（7－1）の孔疏の引書名、「皐螽」（7－3）の本草拾遺の引書名、「蠨蛸」（7－13）の陸疏の引書名を欠く。「螣」（7－21）の旁を「養」に、「螗」（7－26）の宋邢昺爾雅疏を「宋而昺爾雅注」に作る。

○新潟大学附属図書館

32・佐野文庫　八三－一一

詩経小識八巻　　**和大一冊**

〔稲生若水〕撰

〔江戸後期〕寫　佐野喜平太舊藏

①香色表紙（二十七・七×十八・四糎）、左肩に紙箋を貼付し「詩經小識　〈完〉」と墨書。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩経小識巻／（低三格）草屬略第一／荇（隔二格）不聞俗名／（以下低一格）荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」、概ね引書ごとに改行、按語はさらに一格低す、引書名小字単行あるいは双行。墨付き全七十三張、一筆か。

⑤無辺無界、毎半葉十行二十一至二十五字、字面高さ約二十一・五至二十四・二糎。

⑥「詩經小識巻幾某屬第幾終」

⑦巻八尾題前に附録「羅木」あり、尾題後改張して宝永六年若水跋あり（若水の署名なし）。

⑨書入：間々項名の上に墨圏点あり、間々俗名に読み仮名を付す。

⑩佐野文庫は、明治大正期に新潟で石油会社の頭取となった後、政治家としても活動した佐野喜平太の旧蔵書である。[14]

「唐棣」（3－6）の漳州府志の「漳」を「滹」に作る。「木瓜」（3－20）の致富全書の「夜露日暴漸而」から後ろを欠く。「杞」（3－47）の項名、「鴈」（4－8）の唐顔師古急就篇註の引書名を欠く。「鶚」（4－16）を「鶚」に作る。

○大阪府立中之島図書館

33・甲和三四六

詩經小識八巻　　**和大一冊**

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫

①茶色表紙（二十三・四×十七・五糎）、題簽概ね剝離、胡粉にて「詩〔經小〕識初〔稿〕［　］〈全編〉」と記す。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識巻一／（低二格）草屬畧第一／荇／（以下底一格）不聞俗名／荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全一〇六張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉九行二十字、字面高さ約十八・五糎。

⑦巻八後、改張して宝永六年若水跋、さらに改張して附録「羅木」あり。

⑨書入：全体に返り点・連結点・送り仮名あり、俗名に読み仮名を附す（本文同筆）。
⑩「勺藥」（1－41）の呂東莱読詩記、「楊柳」（3－49）の毛伝の引書名を欠く。

○**県立長野図書館**

34・四九九－一一七

詩経小識八巻　　**和大一冊**

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫　山西孝三舊藏

①香色表紙（二十七・五×十九・二糎）、左肩に紙箋を貼付し「〔詩〕經小識」と墨書（一部剝離）。
③「詩經小識初稿目録」（界線書入料紙）
④「詩経小識巻一／（低三格）草屬略第一／苻（隔二格）不聞俗名／（以下低二格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」、毎巻張を改めず界線を引いて接続、概ね引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全七十張、一筆。
⑤匡郭書入料紙、四周単辺（二十二・一×十四・八糎前後）、無界、毎半葉十行二十二至二十六字前後。
⑥附録後に「詩經小識巻八終」
⑦巻八後、改張して附録「羅木」、尾第後、接行して宝永六年若水跋あり。
⑨書入：墨筆にて句点・傍線あり、俗名に読み仮名を附す。朱引あり。印記：冊首に方形陽刻隷書「山西／孝三」朱印記、方形陽刻「信濃／圖書／館印」朱印記、長方形陽刻隷書「寄贈　信濃教育會」朱印記あり。巻一首に方形陽刻「西卿／氏／藏書」朱印記あり。
⑩「山西孝三」の印記は、明治初期に現在の長野県大町市において児童教育に尽力した教育者の山西（中村）孝三（一八三四－一九二二）であろう[15]。
「菽」（1－63）の項名を欠く。「棘」の詩緝を「宋厳餐詩解」に、「烏」（4－9）を「鳥」に作る。

○**佐賀県立図書館**

35・鍋島家文庫　鍋九九一－九五

詩經小識八巻　　**和大一冊**

稲〔生若水〕（義）撰

天明四年（一七八四）寫　津田松園校訂識語　鍋島家舊藏

①香色表紙（二十六・八×十九・〇糎）、左肩に子持枠題簽を貼付し「詩經小識〈自一至八〉完」と墨書。

②副葉子前後各一張。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低二格）草属略第一／荇（隔一格）不聞俗名／（以下低一格）荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上根在水」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全七十五張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉十行二十四字、字面高さ約二〇・五糎。

⑥「詩經小識卷幾終」（巻二・八は尾題欠）

⑦巻八後、接行して附録「羅木」、改張して宝永六年若水跋あり（「寶」を「寛」に誤る）。

⑧大尾に朱筆にて「天明甲辰之秋　松園津田欽道鑒定句」と校訂識語あり。

⑨書入：全体に藍句点、まれに朱句点・圏点・朱引あり。眉上に本文同筆の朱墨校注・按語あり、また間々同墨筆にて俗名に読み仮名を附す。さらに本文とは別筆の朱・墨・藍筆にて校注・按語あり（津田松園）。印記：毎巻首に長方形陽刻隷書「鞆屋文庫」朱印記、冊首に方形陽刻楷書「鍋島／家藏」朱印記あり。

⑩津田松園は、江戸中期から後期の医師。佐賀藩第九代藩主・鍋島斉直（一七八〇－一八三九）に仕えた[16]。

「苓」（1－19）の毛詩集解、「莠」（1－42）の爾雅翼を欠く。

○慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

36・一一三三・三－ト四三－一（A）

詩經小識八卷　　和半一冊

稲〔生〕若水撰

〔江戸後期〕寫

①香色表紙（二十三・四×十六・六糎）、左肩打付にて「〔詩〕経小識［　］〈稲若水著〉」と墨書。虫損あり。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低二格）草属畧第一／荇（隔二格）不聞俗名／（以下底一格）－一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、引書ごとに改行、引用中の項名は「－」にて略記、

引書名も「唐陸－－－－疏」などと省略。墨付き全九十四張、一筆。

⑤無辺無界、毎半葉九行二十字、字面高さ約十九・八糎。

⑦巻八後、改張して宝永六年若水跋、続けて附録「羅木」あり。

⑨書入：朱墨校注あり、縹色不審紙あり。

⑩「鴻雁」（4－23）の孔穎達毛詩疏を「唐孔穎達毛詩傳」に、「蟠蟜」（7－4）の爾雅註を「爾雅疏」に作る。

37．一二三・三－ト四四－一（B）

詩經小識八卷　　和半一册

稲〔生若水〕（義）撰

〔江戸後期〕寫

①香色艶出表紙（二十三・五×一六・二糎）、左肩打付にて「明史稿藝文志〈全〉」と墨書したるを墨消し、右横に「詩經小識」と朱書。天地截断。全張襯紙あり。

④「詩經小識卷之一／（低二格）草屬畧第一／荇／（以下低一格）俗名俟索索／荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き九十四張、一筆。

⑤墨刷罫紙、四周双辺（二十・三×十三・七糎）、有界、毎半葉九行、毎行二十字書写、版心白口単黒魚尾。

⑦巻八後、改行して宝永六年若水跋あり。跋後、別筆にて附録「羅木」を補う。

⑨書入：間々俗名に読み仮名を附す。本文同筆にて眉上に朱墨校注（「一作…」）あり。誤字多く、朱筆にて校改、欠字を補塡す。「莪」（2－7）には貝原益軒の説を引き、「蜉蝣」（7－8）には「修按…」と、杏雨C本と同じ評語あり。「蝨」（1－24）の「未詳」の下にも「修曰…」の補注あり（本文同筆）。

⑩「龍」（1－37）按語「今生下湿地極似」の次行に「莠」の俗名および爾雅翼の引用「草似稷」までを混入。「莠」（1－42）は俗名と爾雅翼の冒頭一行分を欠く（両者朱筆にて指摘）。「芩」（2－3）の項名を「苓」に作る（朱筆訂正）。「駁」（3－46）の項名および俗名を欠く（朱筆補記）。附録「羅木」を「羅衣」に作る（本文別筆）。

【附】国立公文書館　内閣文庫（一九六－一二五）

詩經小識補七卷附拾遺一卷　　和大七冊

稲〔生若水〕（宣義）撰　藤沼尚景校並増補

安永十年（一七八一）寫（補訂者自筆）　昌平坂学問所舊藏

①浅葱色布目表紙（二十七・五×十八・〇糎）、左肩に紙箋を貼付し「詩経小識補〈幾／某属〉」と墨書、右下に「經說」印刷紙箋貼付。

③「詩經小識補題辭／寗永己丑之歳若水稲君嘗繇白石君之需而廼品題毛／詩草木鳥獸蟲魚者蓋有據多識於鳥獸草木之名之教／也…／／…小識寫本相傳殆六十年于茲好古之徒謄鈔祕之予亦爲家藏書往時庚辰之春罹災烏有焉爾後取數本而閲之則三寫之訛魯魚不足焉馬續之不可以謂之完璧也…／…頃復得一本校讐之而附各家二三之說及愚案以示同志併報稲君遺意耳…／／…／明和七季庚寅九月甲子／（低十一格）東都　藤沼尚景謹撰」

「詩經小識叙」（宝永六年若水跋）

「詩經小識補卷第一目次」（毎巻首に細目あり）

④「詩經小識補卷第一／（低八格）平安　稲　宣義　彰信　編／（低八格）東都　藤沼尚景　行甫　補／（低二格）草屬畧上第一／〇荇／（以下低一格）俗名俟索索／荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上根」、引書ごとに改行せず、若水の按語はさらに一格低す。各項の末尾に「補」として出典となる『詩経』の句や毛伝・朱注など漢籍を引用、低一格して「音釋」を附す。間々さらに低一格して尚景の按語あり。『詩経小識』では巻八となっていた退類略を巻立てせず、附録「羅木」含めて巻七虫属略内に組み入れる。墨付き〈第一冊：巻一草属「荇」至「蒹」〉四十二張、〈第二冊：巻二草属「莪」至「茆」〉三十七張、〈第三冊：巻三木属〉五十三張、〈第四冊：巻四羽属〉四十一張、〈第五冊：巻五毛属〉二十八張、〈第六冊：巻六鱗属・巻七虫属・退・附録〉四十六張、〈第七冊：拾遺〉二十一張、一筆。間々料紙を切除し紙背から紙を補い修正す。

⑤「此君亭藏書」墨刷罫紙、左右双辺（二十・八×十三・〇糎）、毎半葉十行、毎行二十二字書写、版心白口双黒魚尾（対向）、上象鼻「詩經小識補」魚尾間「巻之幾　　幾」墨筆書入。

⑥「詩經小識補卷第幾〈終〉」

⑦第七冊「詩經小識拾遺／（低八格）東都　藤沼尚景　行甫撰／（以下序五行低二格）稲君既辨退五種〈予〉復拾其他所遺之品若干條以／羽翼斯編…／／…而輯錄數種以補之名曰拾

遺猶恐有漏呑舟之／魚也伏冀博洽君子是正幸甚」

⑧拾遺の末尾に識語「（以下低一格）詩經小識補七卷拾遺一卷合八卷明和五年戊子／九月六日就稿安永十年辛丑二月二十八日卒業凡／十四年五易稿再免災第六稿校定已成而爲藏書／安永辛丑二月／（低七格）東都　藤沼尚景行甫七十二歳臨寫」墨書。

⑨書入：全体に朱筆にて句点・声点あり、眉上に朱筆にて校注あり（本文同筆）、墨筆にて俗名に読み仮名を付す。印記：自序・識語の署名左横に方形陰刻「藤印／尚景」朱印記、方形陽刻「行／甫」朱印記あり。自序題下に瓢箪型陽刻「竹窗」朱印記あり。毎冊首に長方形陰刻「此君亭／藏書印」朱印記、方形陽刻「大學／藏書」朱印記、長方形陽刻楷書「淺草文庫」朱印記、方形陽刻「日本／政府／圖書」朱印記あり。毎冊表紙に長方形陽刻楷書「番外書冊」墨印記あり。

⑩藤沼尚景が若水『詩経小識』の各項について漢籍からの引用を増補し、さらに音釋・校注・拾遺を加えたもの。異名同種の項目や同名の項目は統合するなど、整理・再編が見られる。序跋の印記からして尚景の自筆と考えられるが、尚景については未詳。[17]

「瓠」（1－25）に「甘瓠」（2－4）を統合。「蓬」（1－29）を「葭」（1－13）の後に配す。「葦」（1－28）を「萑葦」に作る。「莠」（1－42）の按語を欠く。「蒹葭」（1－49）の項名を「蒹」のみに作る。「稂」（1－57）に「稂」（2－14）を統合。「瓜」（1－64）に「瓜瓞」（2－20）を統合。「荼」（1－68）を欠く。「蓼」（2－30）の項名を「荼蓼」に作る。「桑」（3－10）を「漆」（3－16）の後に配す。「竹」（3－17）の項名を「綠竹」に作る。「駁」（3－46）を「櫟」（3－39）の後に配し、項名を「駮」に作る。「杞棘」（3－53）を欠く。「鷺」（4－40）を「晨風」（4－15）の後に配す。「鴞」（4－16）の後に「鵜／　未聞俗名」を加える。[18]「鼠」（5－14）を「麟」（5－4）の後に配す。「鹿」（5－7）に「麀」（5－25）を統合する。「豝」（5－9）・「豵」（5－10）・「豜」（5－23）を統合する。「牛」（5－15）の項名を「牛犉剛」に作る。「盧」（5－18）の項名を「盧犬」に作る。「獫歇驕」（5－20）を「狸」（5－22）の後に配す。「鱧」（6－10）の「清王金孺詩経廣大全」を「清王夢白詩經廣大全」に作る（金孺は字）。「螓」（7－5）の後に「蛾／俗名各矣谷那哲卜（カイコノテフ）」を加える。「青蠅」（7－24）を「蒼蠅」

（7－6）の後に配す。「蜩」（7－9）に「螗」（7－26）を統合する。「蠶」（7－27）を「莎雞」（7－10）の後に配す。「螟」（7－20）から「賊」（7－23）までを一項とする。全体的に俗名の「ワ」の音を「華」に作る（若水遺稿本は「黄」）。

三　共通する異同

以下に複数の伝本に共通する異同について、前稿で紹介した伝本も含めて見ていきたい。なお、藤沼尚景『詩経小識補』（以下、『小識補』）は増補・改編が加わっており、一概に比較することができないため、参考にとどめる。

（一）前附の有無と後附の順序

本文に入る前に、前附と後附の構成ついて各伝本の違いを確認したい。

①目録の有無

○目録あり

杏雨A・京大農生経・東大理・富山大・筑波大・茨城大・中之島・長野図・佐賀図・斯道A

○目録なし

杏雨B・島根大・斯道B

前稿の分を合わせると、目録のある伝本が二十五本、ない伝本が十本となり、目録を有す伝本の方が明らかに多い。杏雨C本は巻一から三が欠けているため、目録の有無は不明。その他目録のない伝本も表紙の付け替えなどで外れてしまった可能性も考えられよう。

②附録と跋文の前後関係

○附録－跋文

京大農生経・東大理・筑波大・茨城大・新潟大・長野県図・佐賀県図

○跋文－附録

杏雨A・同B・同C・富山大・島根大・中之島・斯道A・同B（附録は別筆）

前稿の分と合わせると、跋文－附録という構成のものが二十一本、附録－跋文のものが十五本となり、附録－跋文とする伝本の方がやや多い結果となった。

（二）内容構成の異同

①「荇」（1－1）の俗名

「荇」の俗名について、ほとんどの伝本が「不聞俗名」とするのに対し、前稿では国会E本のみが「俟索索」と明記し、内閣本が「不聞俗名」とした上で「俟索索」と注記するのみであった。本稿の調査分では、斯道B本と『小識補』が同様に「俟索索」としている。このことは、「荇」を「俟索索」とするテキストが国会E本のみに現れた特色ではなく、同様の伝本が一つのグループとして存在していたことを示している。[19]

その他「荇」の俗名について、筑波大本には墨筆で、佐賀県図本には朱筆で「アサヾ」と書き入れられている。

②「葑」（1－15）

京大農生経・茨城大本は二つ目の郭璞爾雅註「須蘓蕪蘓蕪似羊蹄葉細味酢可食[20]」を欠く。

③「勺藥」（1－41）

中之島本は呂東莱読詩記の引用を欠く。杏雨A・同B本は次の「莠」（1－42）の項名の下に小字で補記する形式を取る。

④「甘瓠」（2－4）

前稿では、研医会本が「芩」（2－3）と「臺」（2－5）の間に小字でこの項目を補記しており、おそらく底本はこの項目を欠いていたものと想像される。本稿では島根大本がこの項目を欠く。

⑤「藍」（2－18）

前稿では京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本がこの項目を欠いていた。本稿では島根大・斯道A本に同様の脱落が見られる。

⑥「菫」（2－21）

京大農生経・茨城大本は、詩経説約の引用について各行の上下両端の数文字を残して中央の多くの部分が欠落している。おそらく祖本に汚損などがあったものと想像される。

⑦「來牟」（2－28）以下四項目の配置

巻二の末尾「來牟」・「稌」（2－29）・「蓼」（2－30）・「茆」（2－31）について、国会B・同C・同D・都立中央本は巻一の末尾に配し、特に国会B本は巻一と巻二の両方にこの四項目を配していた。前稿で指摘した通り、詩経の配列に従うならば、これらは巻二の末尾にあるべき項目である。本稿では、筑波大・新潟大・長野県図本が同様に巻一の末尾にこれらを配し、佐賀県図本は国会B本と同様に巻一と巻二の両方にこれらを配している。

また、東大理本は本来の巻二の末尾に配し、さらに巻一の末

尾に紙箋を貼付してこの四項目を補記している。

⑧「**樸楸**」（**3－5**）

前稿では京大人文研・都立中央本が重修鎮江府志からの引用を欠いていた。本稿では筑波大本に同様の脱落が見られる。

⑨「**木瓜**」（**3－20**）

前稿では国会B・同C・都立中央本が按語を欠いていた。本稿では長野県図本に同様の脱落が見られる。

また、東大A本では致富全書の「花深紅色」以降の引用をすべて欠いていた。本稿では杏雨B本が同様に欠き、「花深紅色云々〈本草／綱目〉」と作る。

⑩「**楊**」（**3－36**）・「**條**」（**3－37**）

この二項目について、前稿では京大谷村A・同谷村B・岩瀬・東大B本が「梅」（3－38）の後ろに配し、「楊」には「臼（舊）有梅上」、「條」には「同上」と注記していた。本稿では島根大と斯道A本がこの配列を採り、斯道A本はやはり眉上に朱筆にて「旧有梅上」と注記している。

⑪「**櫟**」（**3－39**）**の孔穎達疏**

若水遺稿本では「櫟」について陸疏を引用するにとどまるが、それ以外の伝本では全て陸疏の次に孔穎達疏からの引用「說者或曰柞櫟或曰木蓼璣以爲此秦詩也宜從其方土之言柞櫟是也」を付加しており、本稿で示した伝本もすべてこの引用を付加している。なお、杏雨C・茨城大本は巻三を欠くため不明。

⑫「**鷊**」（**4－33**）

前稿では京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本が厳粲詩緝の「四足之美有」から後ろを欠き、改行せずそのまま次の毛晋広要の冒頭「厳氏詩緝引」に接続していた。本稿では、島根大・斯道A本に同様の脱落が見られ、斯道A本は紙箋を貼付して脱落分を補記している。

⑬「**鳳凰**」（**4－37**）・「**梟**」（**4－38**）

前稿では都立中央本が両者の順序を逆にしていた。本稿では長野県図本が同様の順序を取る。

⑭「**鴞**」（**6－9**）

前稿では人文研本が按語を欠いていた。本稿でも京大農生経・新潟大本が同様に按語を欠く。

⑮「**莎雞**」（**7－10**）

前稿では東大A本が陸疏の「六月虫飛而」より後の一行分を欠き、そのまま兼名書に接続していた。本稿でも杏雨B本に同様の脱落が見られる。

⑯「**蛇**」（**7－16**）

前稿では京大谷村A・谷村B・岩瀬・東大B本がこの項目を欠いていた。本稿では斯道A本に同様の脱落が見られる。

⑰「**碩鼠**」（**8－3**）

前稿では京大人文研・国会C・同D・都立中央本が鄭箋の引用を欠いていた。本稿では筑波大本に同様の脱落が見られる。

（三）按語の配置

若水の按語は、基本的に各項目の末尾に附されるが、いくつかの項目では引用の合間に挟まる場合がある。次の項目では、按語の配置が伝本によって異なる。

①「**勺藥**」（**1－41**）

前稿では、研医会本が先頭に按語を配し、京大谷村A・同谷村B・国会A・岩瀬・内藤A・同B・東大A・同B本が呂東莱読詩記の前に按語を配していた。本稿で紹介した伝本で読詩記の前に案語を配すのは、斯道A・同B本である。また、杏雨A・同B・中之島本は読詩記の引用を欠くものの按語は存するため、やはり按語を読詩記の前に置く配列だったのかもしれない。

②「**鬯**」（**2－27**）

前稿では若水遺稿・国会D本を除く諸本が爾雅翼の前に按語を配していた。本稿でもすべての伝本が同様に配す。

③「**駁**」（**3－46**）

若水遺稿・国会D本を除く諸本が五雑俎の前に按語を配していた。本稿でもすべての伝本が同様の配列を取り、筑波大・長野県図本は他本の多くが一格下げる按語を下げずに書写している。また、新潟大本は五雑俎の引用をさらに一格下げる。

④「**柞**」（**3－58**）

前稿では若水遺稿・国会D本を除く諸本が嘉祐註本草の前に按語を配していた。本稿でもすべての伝本が同様の配列を取る。

（四）項名表記

①「**芣苢**」（**1－5**）

前稿では、国会D・同C・都立中央・京大人文研本以外は「芣苣」に作り、京大谷村Aと谷村B本が「芣苣」に作っていた。本稿では筑波大本が「芣苡」に作る他は皆「芣苣」に作る。

②「**葦**」（**1－28**）・「**萑葦**」（**1－59**）

前稿では国会E本が「葦」の「牛」を「巾」に作っていた。本稿では斯道B本が同様に作る。

②「艾」（1－34）

前稿では京大人文研・国会C・都立中央本が項名を欠いていた。本稿では筑波大本が同様に項名を欠く。

③「扶蘇」（3－27）

前稿の多和本および本稿の東大理本は、「扶」を「技」に作る。東大理本は別筆にて「扶」と校改する。

④「獫歇驕」（5－20）

前稿では京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B本は「獫／歇驕」と、二物として表記していた。本稿では斯道A本が同様に表記し、杏雨A本が「獫」のみ掲げる。

⑤「螽斯」（7－1）

前稿では京大人文研・国会C・同D・東洋・都立中央本が「螽」のみに作っていた。本稿では杏雨A・新潟大・筑波大・長野県図・佐賀県図本が同様に作る。

（五）引書名の誤脱

①「蘩」（1－7）の本草図経

前稿では京大人文研・国会C・都立中央本が「本草真經」に作っていた。本稿では筑波大・茨城大・長野県図・佐賀県図本が同様に作る。

②「荑」（1－20）の毛伝

佐賀県図・斯道B本が「毛詩」に作る。

③「蓍」（1－58）の留青日札

前稿では国会C・都立中央本が「留青日記」に作っていた。本稿では筑波大本が同様に作る。その他、杏雨A本は「留」を欠き、島根大本が「留」を「雷」に作っている。

④「薁」（1－61）の毛伝

前稿では京大谷村A・同谷村B・東洋・研医会・東北大狩野・多和本が引書名を欠き、このうち研医会本は朱筆で引書名を補っていた。本稿では京大農生経・島根大・斯道A本が同様に引書名を欠く。また、茨城大本は毛伝の引用自体が脱落している。

⑤「荏菽」（2－22）の毛詩伝

この引用文は孔穎達疏からの引用であるが、前稿では若水遺稿本のみが引書名を「毛詩傳」に作っていた。本稿では富山大本が同様に「毛詩傳」に作り、その他の伝本はすべて孔穎達疏とする。

⑥「鬯」（2－27）の毛伝

前稿では京大人文研・国会C・都立中央本が引書名を欠いていた。本稿では杏雨B・筑波大本が同様に引書名を欠く。

⑦「唐棣」（3－6）の致富全書

明周文華の『致富全書』は、陶朱公の撰と伝えられる『致富奇書』と混同されたようで、これと誤る伝本がしばしば見られる。東大理本は「致富奇書」に作り、別筆にて「金」と注記する。新潟大本は「全書」に作るものの「全一作奇」と注記する。杏雨B本は「富」を「當」に作る。

⑧「木瓜」（3－20）の致富全書

前稿では京大人文研・国会C・都立中央本が「致富奇書」に作り、人文研本はそれに「奇書一作全書」と注記していた。本稿では長野県図本が人文研本と同様に注記し、筑波大本は「致富寄書」に作る。また、東大理本は「致富全書」としながら「一作奇」と注記する。

⑨「舜」（3－26）の致富全書

前稿では京大人文研・都立中央本が同書を「致富貴書」に作り、人文研本は「貴一作全」と注記していた。本稿でも新潟大・長野県図本が同様に「致富貴書」に作り、長野県図本は人文研本と同様に注記する。また、筑波大本は「奇書」に作り、東大理図本は「全書」に作り「全一作貴」と注記する。杏雨A本は「致全全」に作り、杏雨B本は「富」を「當」に作る。

⑩「梅」（3－38）の明毛晋陸璣廣要

前稿では京大谷村A・同谷村B・国会A・同E・東洋・慶大・岩瀬・陽明・東北大狩野・多和本が「陸疏廣畧」に作っていた。本稿では中之島・東大理図・島根大・斯道A・同B本が同様に作る。

⑪「黄鳥」（4－2）の陸疏廣要

前稿では京大人文研・国会C・同D・都立中央本が引書名を欠いていた。本稿では筑波大・長野県図本が同様に引書名を欠く。

⑫「鳩」（4－4）の詩経説約

前稿では、京大谷村A・同谷村B・岩瀬・東大B・陽明・多和本が二つ目の詩経説約の引用に引書名（「同上」）を欠いていた。本稿では京大農生経・茨城大・島根大・斯道A本が同様に引書名を欠く。

⑬「燕」（4－6）の清陳漠子秘伝花鏡

前稿の多和本および本稿の東大理本は「清陳漢秘傳説鏡」に作る。

⑭「鳴鳩」（4－27）の詩経集伝

前稿では、京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本が「集註」に作っていた。本稿でも島根大・斯道A本が同様に作る。

⑮「**鶩**」（**4－34**）**の本草綱目**

前稿では京大人文研・国会C・同D・都立中央本が引書名を欠いていた。本稿では筑波大本が同様に引書名を欠く。

⑯「**羔羊**」（**5－5**）**の毛伝**

前稿では東大A本が引書名を欠いていた。本稿では新潟大本が同様に引書名を欠く。

⑰「**麕**」（**5－6**）**の本草図経**

前稿では東大A本が引書名を欠いていた。本稿では新潟大本が同様に引書名を欠く。

⑱「**螽斯**」（**7－1**）**の宋鄭夾漈爾雅註**

前稿では人文研・国会C・同B・東大A・同B本が「註」を「疏」に作っていた。本稿では杏雨B・東大理・富山大・筑波大・長野県図・斯道A・同B本が同様に「疏」に作る。また、茨城大本は引書名を欠く。

⑲「**流離**」（**8－1**）**の詩経集伝**

前稿では、京大人文研・国会C・同D・都立中央本は引書名を欠いていた。本稿では筑波大・長野県図本が同様に引書名を欠く。

また、前稿の京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本は「集註」に作っていた。本稿では島根大・斯道A本が同様に作る。

四．整理

前稿までの整理を通じて、少なくとも二つのまとまりが見えてきたことは先に述べた。さらなる調査の結果、この二つの系統にあると考えられる伝本が他にもいくつか見られ、さらに、前稿では他に同系統の伝本が見られなかったが今回の調査によって新たなまとまりも見えてきた。

以下、それぞれのまとまりについて再整理を行う。なお、前稿で紹介した伝本は（　）内に示した。

（ア）島根大・斯道A本（京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明）

はじめに挙げたように、ア群の主な特徴は次の三点である。

・「藍」（2－18）の項目が脱落している。
・「鷸」（4－33）の厳粲詩緝の「四足之美有」から後ろを欠き、改行せずそのまま次の毛晋広要の冒頭「厳氏詩緝引」に接続する。
・「鳴鳩」（4－27）と「流離」（8－1）の引書名「詩經集傳」を「詩經集註」に作る。

この中でも、特に京大谷村A・同谷村B・岩瀬本は、岩瀬本の書写者である山本封山の山本読書室との関係を指摘した。本稿で紹介した伝本の中では、島根大・斯道A本がこの異同を満たしている。さらに、この両本は「楊」（3－36）と「條」（3－37）を「梅」（3－38）の後ろに配する点でも岩瀬本と共通し、特に斯道A本は眉上に「旧有梅上」と同じ注記を持つことからしても、より岩瀬本に近いといえる。ただし、京大谷村A・同谷村B・岩瀬本に見られる次の異同は、島根大・斯道A本には見られない。

・「蕢」（1－44）の爾雅註の次に「李巡曰別二名郭云如續断寸〃有節不可食也幽州人……」とし、これを陸疏からの引用とする。しかし、実際は「李巡曰別二名郭云如續断寸〃有節」までが爾雅疏の引用で、「不可食也」以下は「蘞」（1－47）の陸疏である。
・「譽」（4－29）の項目名を「譽」に作る。
・「鴛鴦」（4－32）の按語を欠く。

残念ながら、島根大・斯道A本ともに書写者や旧蔵者の手がかりとなるものが残っておらず、ア群の他の伝本とどのようなつながりがあるのか明らかにできていない。

この他、ア群の核とした三つの異同は見られないものの、「梅」（3－38）の明毛晋陸璣広要を「廣畧」に作る点は、ア群として挙げた伝本以外にも国会A・同E・東洋・慶大・東北大狩野・多和本と広く見られ、本稿で紹介した伝本でも島根大・斯道A本に加えて東大理・中之島・斯道B本に認められた。同様に「鳩」（4－4）の詩経説約の引書名を欠く点は、京大谷村A・同B・岩瀬・東大B・多和本に見られ、本稿では島根大・斯道A本の他に京大農生経・茨城大にも認められる。京大農生経本と茨城大本の関係については後述するが、これらはア群の

伝本と重なりながらも別の分岐を辿ったと考えられる。

（イ）筑波大・新潟大・長野県図・佐賀県図本（京大人文研・国会B・同C・同D・都立中央）

イ群の核となる特徴は、巻二の末尾「來牟」（2－28）・「稌」（2－29）・「蓼」（2－30）・「茆」（2－31）を巻一の末尾に配す点である。本稿で紹介した伝本の中では、筑波大・新潟大・長野県図・佐賀県図本が同様に配している。

このうち、前稿の国会B本と佐賀県図本は巻一と巻二の両方にこの四項目を配し、行字数や異同、行間の校注・音注、跋文の「寶永」を「寛永」に誤る点で共通する。佐賀県図本は天明四年（一七八四）津田松園校訂識語、国会B本は天明八年（一七八八）関松窓[21]（一七二七－一八〇一）の校訂識語を有し、書写年代も近い。これらのことから、両者はかなり近い関係にあったと推測される。

上記の特徴に加えて、京大人文研・国会C・都立中央本では「螽斯」（7－1）の項名表記を「螽」のみとする点に特徴があり、同様の特徴は杏雨A・筑波大・新潟大・長野県図・佐賀県図にも見える。この中でも特に筑波大・長野県図本は「黄鳥」（4－2）の陸疏広要や「流離」（8－1）の詩経集伝の引書名を欠いている点でイ群の特徴を多く備えているといえよう。さらに構成の点からいえば、前稿では京大人文研・国会C・都立中央本に巻八の尾題が巻尾だけでなく附録と跋文の間に重複して現れるという特徴があった。本稿では筑波大・長野県図本も同様の構成になっている。

また、国会C本は「龍珠館」墨刷罫紙が用いられていたが、筑波大本も「寛政四年二月　龍珠舘藏」と、「龍珠館」の名が記されている。この「龍珠館」は同一のものであろうか。書写時期は国会C本の方が筑波大本より十年遅いが、両者は異同や各引書の改行状況がほぼ一致し、さらに書入も一致するものが多く見られた。これらのことから、両者の「龍珠館」は同一の場所あるいは人物を指すと考えられよう。[22]

（ウ）〔杏雨C〕・斯道B本（国会E）

ウ群は「荇」の俗名を「俟索索」と明記するグループである。前稿の国会E本に加えて、本稿では斯道B本が「荇」の俗名を「俟索索」と明記していた。当時、「荇」の同定には諸説あり、他の伝本では「不聞俗名」として特定していない。

「俟索索」の他にも、国会E・斯道B本は「葦」（1－28）・「萑葦」（1－59）の「牛」を「巾」に作る点で共通する。また、この両本は、「蝨」（1－24）について若水が「未詳」とする下に「修曰毛傳既云蝨貝母則可據之」という注が書き入れられている。「修」の書入についてさらにいえば、斯道B本は「蜉蝣」（7－8）の按語の眉上に「修按予地方／水邊之俗稱／索黎莫施」とある。これは杏雨C本にもまったく同じ書入があり、斯道B本とは行字数も同じくする。残念ながら、杏雨C本は巻一から巻三を欠くため、「荇」の俗名をどのように表記していたか知る術がない。ただ、「修」の書入という共通点からすれば、国会E本や斯道B本と同様に「荇」の和名を「俟索索」としていた可能性は十分考えられよう。杏雨C本はさらに「莎雞」（7－10）や「碩鼠」（8－3）にも眉上に「修」の補注が書き入れられているものの、これらは国会E本や斯道B本には見られない。特に国会E本は眉上にどの補注も見られない。これらの書写者については手がかりがなく、どのようなつながりがあったかは不明だが、同系統の伝本と見てよい。

また、『小識補』も同様に「俟索索」と作るが、これには藤沼尚景によって校訂・再編が加えられ、底本によるものなのか、尚景の改変なのか不明である。ただ、尚景序によれば数本を閲読したとあり、その中にこの系統の伝本があったとも考えられよう。

（エ）京大農生経・茨城大本

この両本は「葦」（2－21）の詩経説約の大部分を欠く点に特徴があり、本文の行字数や後附の順序なども一致する。また、「鳩」（4－4）の詩経説約の引書名（「同上」）を欠く点でア群の伝本と共通するが、ア群とそれ以上の共通点は見られないため、別のグループとした。

（オ）杏雨B本（東大A）

この両本は「木瓜」（3－20）と「莎雞」（7－10）にまったく同じ脱落が見られ、跋文の後に附録を配す順序も一致している。ただし、東大A本は「原本此下脱一張」と注記して「貉」（5－21）から「罷」（5－27）を欠くが、この欠落は杏雨B本には見られない。そして、杏雨B本は「龜」（6－13）から「鰷」（6－16）を欠くが、東大A本にこの欠落は見られない。このような比較的大きな欠落が一致しないということは、両者は同

じ祖本に発するものの、そこからに分岐して異なる欠落のある伝本を転写したと考えられる。

（カ）東大理本（東洋・多和）

これら三本すべてに共通する異同は、管見の限り「梅」（3－38）の陸疏広要を「廣畧」に作る点のみであり、これはア群の伝本に多い共通点でもある。しかし、ア群の核とした三つの異同は見られず、巻一で項名・俗名と引用との間にしばしば空行が差し挟まれる点は、箇所も行数も三本すべて一致している。この特徴をもってア群とは別の系統とした。多和本は巻首に「平安　稲宣義彰信纂輯／江陵　王崧維嶽氏校閲」という独自の形式を取るが、本文はこの系統にあると考えてよいだろう。このうち、多和本と東大理本は「扶蘇」（3－27）の「扶」を「技」に作り、「燕」（4－6）の清陳漠子秘伝花鏡を「清陳漢秘傳説鏡」に作るなど共通点が多い。書写年代は多和本に寛保二年（一七四二）の校閲識語がある他は未詳。

おわりに

以上、現在までに調査しえた『詩経小識』の諸伝本について二稿にわたって紹介し[23]、異同をもとに大まかな整理を行った。前稿の段階では、山本封山の山本読書塾周辺で書写されたと考えられるア群、巻二の末尾「來牟」（2－28）以下四項目が巻一末尾につくイ群、そしてそれ以外という区分にとどまったが、本稿での追加調査により、「荇」（1－1）の俗名を「俟索索」とするウ群、「菫」（2－21）の詩経説約の大部分を欠くエ群、「木瓜」（3－20）の致富全書の一部を欠くオ群、俗名と引用の間に空行のあるカ群を抽出することができた。

これらに加えて、国会A・慶大・内藤A・同B・杏雨A・富山大本のように、上記のグループと共通する異同を含むものの、上に挙げたような中核となる異同は共有しておらず、若水遺稿本と概ね一致するという伝本が存在する。実のところ、世間に流布した本書のスタンダードは、若水遺稿本の系統ではなくこの一群なのかもしれないと筆者は考えている。というのも、前稿で指摘した通り、若水遺稿本は次の三点で他の多くの伝本と

異なるためである。

①「荏菽」（2－22）の孔穎達疏の引書名を「毛詩傳」とする。

②「檽」（3－39）の孔穎達疏の引用を欠く。

③「鬯」（2－27）・「駁」（3－46）・「柞」（3－58）の按語の配置。

①については富山大本が同様に作り、③は国会D本が同様の配置を取るが、両本とも他の異同は一致しない。大勢として、若水遺稿本がどの系統にも属さないということは本稿の追加調査でも同様であった。

もともと本書は新井白石が徳川綱豊に『詩経』を進講する際の参考書として若水に編纂を依頼したものであり、宝永六年の自跋には「稿成疎漏特甚、乃欲焚棄之數矣。惟恐因循不一成書、有怠慢之罪、強寫錄、敢獻左右」という。書き上げた原稿は満足いく出来ではなかったが、ぐずぐず先延ばしにしていては怠慢となってしまうことを恐れ、献上したというのである。おそらく、これは白石に献上したことをいうものであろう。今のところ、明確に献上本と分かる伝本は見つかっていない。自筆の若水遺稿本がこれに当たると仮定しても、他の伝本と系統が異なることからすれば、これがそのまま世間に伝写されていったとは考えにくい。

本書の意義は、詩経名物書の先駆けという日本博物学史上の意義だけにとどまらない。『小識補』の藤沼尚景序に「小識寫本相傳殆六十年、于茲好古之徒、謄鈔祕之」ということからも、限られた人々の間で伝写されてきたことがうかがわれ、それ自体が当時の知的ネットワークの足跡となっている点も注目に値する。岩瀬文庫の山本封山写本を中心としたア群は、その好例ではなかろうか。その他、杏雨A本は延享四年福主なる人物の書写で、この人物については未詳ながら、識語に「頃乞津嶋某先生而繕写」とある。この「津嶋某先生」は、津島如蘭か、あるいはその縁者であろう。また、筑波大と国会C本の「龍珠館」本や、天明四年津田松園校訂の佐賀県図本と天明八年関松窓校訂の国会C本がそれぞれ近い関係にあったことは指摘できるが、具体的にどのような関係だったのかまでは明らかにできていない。筆者の浅学ゆえに書写者・旧蔵者についても未詳のままとなっているものも多く、憶測を連ねるばかりになってしまった。識者のご教示を賜れれば幸甚である。

加えて、本書が後世にどのような影響を与えたのかという点が今後の課題となる。例えば、陽明文庫本は近衛家熙の筆になるものと考えられるが、その侍医・山科道安が享保九年から同

二〇年（一七二四－一七三五）にかけて書き留めた『槐記』では、茶道や華道に精通した家熙が名物学や本草学に関心を寄せ、それらの疑問について若水の弟子である松岡玄達に尋ねよと指示している。[24] しかし、若水や本書については言及がない。玄達の弟子である江村如圭の『詩経名物弁解』では、いくつかの項目で若水の説を引用するものの、その典拠については明言しない。[25] この課題については、当時の学問伝授のあり方なども含めて、改めて検討していきたい。

注

1　上野益三『日本博物学史』講談社、一九八九年（初出は平凡社一九七三年、同補訂版一九八六年）、一四四頁。

2　前稿は「稲生若水撰『詩経小識』の伝本調査（一）」『斯道文庫論集』第五十六輯、二〇二二年。

3　谷村B本の書写者「春水」について、前稿の注十七で文政ごろ稲氏に春水という人物がいたことを指摘したが、山本読書塾の門人名簿によると、文政七年以前に入門した門人に内山春水という名が見える（遠藤正治・松田清・益満まを「山本読書室門人名簿の分析と紹介」『近世京都』第一号、二〇一四年参照）。遠藤氏等がまとめた略歴によれば、文政十年には大坂の雨森良圭内に居住していたようで、同系統の谷村A本に「内山」の印記があることからすれば、B本が内山春水の筆写である可能性は十分に考えられよう。内山春水については、国会図書館所蔵の『蘭山採薬記』（特一－一九七七）に文政六年の内山春水書写識語がある。谷村B本が内山春水写とすれば同時期の書写ということになるが、筆跡が同筆か確定しがたい。

4　題簽および井上氏の跋文は若水手稿とするが、筆跡については判断しがたい部分がある。ただ、本文同筆と思われる墨筆で「蜉蝣」（7－8）の按語の眉上に「修按予地方水邊之俗稱索黎莫施」と、「修」の近辺の情報が書き入れられていることからも、若水の手稿本とするにはためらわれる。

5　早稲田大学図書館所蔵『宗祇初心抄』（文庫二〇・〇〇一五七）に同印が見える。これには天明五年（一七八五）の木邨盛寿の書写識語があることから、「種徳堂記」の印主はそれ以降の人物ということになるだろう。なお、画像で比較する限り、農生経本と早大『宗祇初心抄』の筆跡は一

致しない。

6 中野三敏編『近代蔵書印譜』初編、青裳堂書店、一九八四年。

7 『詩経』秦風・終南「有條有梅」の毛伝に「梅、柟也」とあり、『詩経小識』が引く陸疏・陸疏広要・詩経説約も豫章に似た樹木と解している。

8 日本で「せんだん」と呼ばれる植物は古今混乱がある。現在、香木としての「梅檀」は白檀の異称であり、ビャクダン科の常緑喬木を指す。一方、センダン科の落葉高木の漢名は「楝」であり、日本では古名「おうち」と呼ばれていたが、江戸時代ごろには一般にこれを「せんだん」と呼び、「樗」（ミツバウツギ科）に「おうち」の名を当てるようになったという（山寺宏『和漢古典植物考』八坂書房、二〇〇三年、一一〇頁および寺井泰明『植物の和名・漢名と伝統文化』日本評論社、二〇一六年、六五五－五八〇頁）。

9 そもそも「梅檀」はインドの古語「チャンダナ」の漢語表記であり、中国にビャクダンは自生していなかった（寺井前掲書、五六七頁）。

10 ただし、鎌倉前期以前に成立した『字鏡集』巻五では「梅」を「ウメ」と訓じている（前田育徳会尊経閣文庫編『字鏡集』尊経閣善本影印集成二十一、八木書店、一九九九年参照）。該本の「梅」字と直接つながるものではないが、そのような読み方が存在していたことは指摘しておきたい。

11 書入は典拠を示していないが、江村如圭『詩経名物弁解』の説と一致する。

12 南紀徳川史刊行会編『南紀徳川史』第十七冊（編者、一九三三年、一四八頁）に「寺内直助　江戸の人儒官」と名が見える。同一人物かは不明。

13 町田三郎「林泰輔と日本漢学」『東洋の思想と宗教』第十四巻、一九九七年。

14 新潟大学部族図書館ホームページ「佐野文庫解題」より（https://collections.lib.niigata-u.ac.jp/collections/sano2kaidai.html、二〇一三年一月七日最終アクセス）。

15 もとは中村姓であったが、山西家の養子となった（石沢清『北アルプス大町ものがたり』信濃路、一九七五年、一三四－一四一頁）。

16 中野礼四郎編『鍋島直正公伝』第一編、侯爵鍋島家編纂所、一九二〇年、二〇一－二〇四頁。また、大滝紀雄翻刻「近世医家人名録」（『日本医史学雑誌』第二十五巻第三号、一

九七九年）によると「山下御門内上邸」とあることから江戸の上屋敷に仕えていたと考えられる。

17 市古貞次等編『国書人名辞典』（岩波書店、一九九八年）は本草家とする。尚景がどのような号を用いていたか不明だが、「此君亭」が尚景ではないとすれば、林龍潭（一七四四－一七七一）が想定され、「番外書冊」や「大学藏書」の印記があることからも、本書は昌平黌に伝わったと考えられる。しかし、龍潭は本書が完成するより前の明和八年（一七七一）に没しており、決しがたい。

18 東大A本は「鴞」（4－16）・「鳲鳩」（4－17）間の眉上に「此間當有鵜／一條脱漏也」と書入がある。

19 前稿で述べたように「荇」の和名には諸説あったようであるが、若水の他の著書を参照する限り、若水が「荇」の和名に「アサザ」と当てているものは見つからなかった。

20 この引用のうち、冒頭の「須蘖蕪」は『爾雅』の本文であり、「蘖蕪似羊蹄」以降が郭璞注である。

21 関松窓（脩齢）は、林榴岡以来四代にわたって林家の学頭を務めたが、寛政異学の禁によって退けられ破門された（渡邊刀水「松牕關脩齢（上）」『埼玉史談』第十巻第二号、一九三八年）。天明八年はまだ林家の学職に就いていた時期である。

22 該本の龍珠館については未詳だが、文政七年（一八二四）に山崎美成や屋代弘賢・滝沢馬琴らが中心となって開かれた好古・好事の会「耽奇会」の参加者に「龍珠館」の名が見える。これは幕府の旗本・桑山修理をいうが、生没年は未詳（今泉定介・畠山健編校『百家説林』第八巻、吉川半七、一八九一年、二頁）。また国会C本は「享和二年十月［　］桃花園藏」の識語を有す。桃花園は、山崎美成が刊行に深く関与したとされる『雲萍雑志』に同名の人物が序を寄せている。（森銑三「雲萍雑志に就いての疑ひ」、同「雲萍雑志と萍花漫筆と」、同「萍花漫筆の著者」、いずれも野間光辰等編『森銑三著作集』第十一巻、中央公論社、一九七一年所収）。龍珠館と桃花園が山崎美成を中心としたネットワークでつながっていた可能性も考えられるが、筑波大本の寛政四年から耽奇会の発足まで三十年以上隔たっており、該本の書写者としては年代的に考えにくいか。

23 本稿で紹介した伝本の他に無窮会所蔵本が目録上三件確認できる（織田文庫オ三七一・神習文庫八四一三井・平沼文

庫八八八三）。ただし、今回は無窮会の図書室が閉鎖中につき、閲覧がかなわなかった

24 例えば、享保九年閏四月十七日の条に「黄蕙ト云艸バナ、何ト申モノニ候ヤ、松岡ヘ尋ヌヘキ由、並ニヱヒ子ノコトモ可尋トナリ…」とあり、翌日には玄達から回答を得ている（『史料大観』記録部所収、哲学書院、一九〇〇年に拠る）。

25 『詩経名物弁解』巻四・鴟鴞に「陸璣註鸋鳩似黄雀而小其喙尖如錐或曰巧婦一名工雀ト云フ此呼フモノナリ。毛鄭二氏モ陸説に従フテ詩ヲ註ス稲若水翁モ此説説得タリ」とある。「鴟鴞」には、ヨタカやフクロウのような鳥とする説と巧婦（ムシクイ）とする説の二説あり、『詩経小識』の按語では「陸元恪孔穎達以為巧婦、今以詩考之為巧婦、其義以優矣」として陸疏等の巧婦説をとっている。

貴重な原本の閲覧を許可してくださった諸機関に感謝申し上げます。

［附記］

本稿は日本学術振興会科学研究費基金（若手研究）「狩野文庫本『毛詩草木鳥獣虫魚疏』における書入れの翻刻と研究」一九K一三〇六一）の成果の一部である。

【表】『詩経小識』収録項目・引書一覧　※引書名の表記は若水遺稿本に従った。

	巻次	項目名		引書
1-1	巻一	荇	不聞俗名	唐陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋羅願爾雅翼／明王蓋臣群芳譜
1-2		葛	（俗名）	
1-3		卷耳	（俗名）	晋郭璞爾雅註／毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋鄭夾漈爾雅註／宋鄭夾漈昆蟲草木畧／按
1-4		藟	未詳	
1-5		芣苡	（俗名）	
1-6		蔞	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／重修錢(鎮)江府志／江陰縣志／按
1-7		蘩	（俗名）	宋邢昺爾雅疏／本草圖經／明周憲王救荒本草／按
1-8		蕨	（俗名）	
1-9		薇	（俗名）	宋邢昺爾雅疏／唐陳蔵器本草拾遺／按
1-10		蘋		爾雅／嘉祐補註本草
1-11		藻	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
1-12		白茅	（俗名）	本草圖經／本草綱目
1-13		葭	（俗名）	清方以智通雅
1-14		匏	（俗名）	本草綱目
1-15		葑	（俗名）	毛傳／郭璞爾雅註／同上(郭璞爾雅註)／邢昺爾雅疏／按
1-16		菲	未詳	
1-17		荼	（俗名）	邢昺爾雅疏／宋寇宗奭本草衍義／宋嚴粲詩緝
1-18		薺	（俗名）	
1-19		苓	未詳	宋沈存中夢溪筆談／毛詩集解
1-20		荑		毛傳
1-21		茨	不聞俗名	郭璞爾雅註／按
1-22		唐	（俗名）	明顧夢麟詩經說約
1-23		麥	（俗名）	
1-24		䖟	未詳	
1-25		瓠	見匏條	
1-26		葵	（俗名） 見葭條	
1-27		芃蘭	（俗名）	
1-28		葦	見葭條	
1-29		蓬	不聞俗名	朱文公集傳／按
1-30		黍	（俗名）	
1-31		稷	（俗名）	
1-32		雚	（俗名）	唐孔穎達毛詩疏／本草綱目
1-33		蕭	（俗名）	宋陸佃埤雅
1-34		艾	（俗名）	
1-35		麻	（俗名）	
1-36		荷華	（俗名）	
1-37		龍	（俗名）	毛傳／本草圖經／按

	巻次	項目名		引書
1-38		茹蘆	（俗名）	
1-39		荼	（俗名）	鄭箋／孔穎達毛詩疏
1-40		蕑	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
1-41		勺藥		毛傳／孔穎達毛詩疏／宋羅願爾雅翼／宋呂東萊讀詩記／按
1-42		莠	（俗名）	羅願爾雅翼／本草綱目／同上（本草綱目）／按
1-43		莫	未詳	
1-44		蘴	（俗名）	爾雅註／爾雅疏／鄭夾漈爾雅註／嚴粲詩緝／按
1-45		稻		埤雅
1-46		粱		本草綱目
1-47		薇	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／明毛晋陸疏廣要
1-48		苦	見前荼	
1-49		蒹葭	見前	陸疏廣要
1-50		莪	（俗名）	群芳譜／按
1-51		紵	（俗名）	
1-52		菅	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
1-53		苕	不聞俗名	同上（毛詩草木鳥獸蟲魚疏）
1-54		鶡	（俗名）	爾雅註／毛詩草木鳥獸蟲魚疏
1-55		蒲	（俗名）	本草綱目
1-56		萇楚	未詳	
1-57		稂	未詳	按
1-58		蓍		本草圖經／明田藝蘅留青日札／按
1-59		萑葦	見葭條	
1-60		蒌		詩緝／按
1-61		蕙	（俗名）	毛傳
1-62		葵	不聞俗名	本草綱目／按
1-63		菽	（俗名）	汀洲府志
1-64		瓜	（俗名）	
1-65		壺		毛傳
1-66		苴		毛傳
1-67		韭	（俗名）	
1-68		荼		毛傳／毛詩疏
1-69		果蠃	（俗名）	毛傳
2-1	巻二	苹	未詳	
2-2		蒿	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／夢溪筆談
2-3		芩	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
2-4		甘瓠		呂東萊讀詩記
2-5		臺	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
2-6		萊	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／明毛晋陸疏廣要／本草綱目
2-7		莪	未詳	
2-8		芑	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
2-9		粟	（俗名）	

	巻次	項目名		引書
2-10		蓬	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
2-11		菖	（俗名）	明周憲王救荒本草
2-12		莞	（俗名）	鄭箋／按
2-13		蔚	未詳	
2-14		稂	未詳	爾雅翼／按
2-15		女蘿	不聞俗名	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
2-16		芹	（俗名）	
2-17		緑	（俗名）	爾雅／爾雅註／嘉祐補註本草
2-18		藍	（俗名）	
2-19		白華菅		毛傳／本草綱目
2-20		瓜瓞		鄭箋／毛詩疏／按
2-21		菫	（俗名）	毛傳／詩經說約
2-22		荏菽		毛詩傳（孔穎達疏）
2-23		秬		
2-24		秠		爾雅疏
2-25		穈		
2-26		芑		同上（爾雅疏）
2-27		鬯		毛傳／毛詩疏／宋鄭夾漈昆蟲草木畧／爾雅翼／按
2-28		來牟		陸德明詩釋文
2-29		稌		毛傳
2-30		蓼	（俗名）	
2-31		茆		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
3-1	巻三	桃	（俗名）	
3-2		楚	未詳	
3-3		甘棠	（俗名）	唐陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏／毛詩集解／按
3-4		梅	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
3-5		樸樕	（俗名）	毛詩疏／本草綱目／重修鎮江府志
3-6		唐棣	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋嚴粲詩緝／明周文華致富全書／漳州府志／邵武府志
3-7		李	（俗名）	
3-8		柏	（俗名）	
3-9		棘		詩緝
3-10		桑	（俗名）	
3-11		榛	（俗名）	
3-12		栗	（俗名）	
3-13		椅	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
3-14		桐	（俗名）	本草圖經／本草綱目／宋陳翥桐譜
3-15		梓	（俗名）	鄭夾漈昆蟲草木畧／按
3-16		漆	（俗名）	
3-17		竹	（俗名）	毛詩集解
3-18		檜	（俗名）	本草綱目／爾雅翼／按

	巻次	項目名		引書
3-19		松	（俗名）	
3-20		木瓜		明周文華致富全書／本草綱目／按
3-21		木桃	未詳	
3-22		木李	（俗名）	明呉元化毛詩鳥獸草木攷
3-23		蒲		詩緝／毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
3-24		杞	（俗名）	同上（毛詩草木鳥獸蟲魚疏）
3-25		檀	不聞俗名	救荒本草／本草綱目
3-26		舜	（俗名）	致富全書／興化府志／按
3-27		扶蘇	未詳	毛傳／唐孔穎達毛詩疏
3-28		柳	（俗名）	
3-29		樞	未詳	
3-30		榆	（俗名）	
3-31		栲	未詳	
3-32		杻	未詳	
3-33		椒	（俗名）	
3-34		杜	見甘棠條	爾雅／天台山方外志
3-35		栩	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
3-36		楊	見蒲條	
3-37		條	未詳	
3-38		梅	未詳	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／明毛晋陸疏廣要／詩經說約
3-39		櫟	見栩條	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／（孔穎達疏）
3-40		苞棣		毛詩集解
3-41		檖		毛詩疏
3-42		枌		爾雅註
3-43		鬱	未詳	
3-44		棗	（俗名）	
3-45		樗	未詳	
3-46		駁	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋沈存中補筆談／明謝肇淛五雜俎／按
3-47		杞		詩緝／本草圖經
3-48		常棣	未詳	
3-49		楊柳		毛傳／嘉祐補註本草／本草圖經／按
3-50		杞	未詳	詩經說約
3-51		枸	（俗名）	本草圖經／本草綱目
3-52		梗	未詳	
3-53		杞棘	未詳	詩經說約／按
3-54		穀	（俗名）	
3-55		梗	未詳	
3-56		蔦	（俗名）	爾雅疏
3-57		苕	（俗名）	本草圖經／宋寇宗奭本草衍義／宋羅願爾雅翼／詩經說約／按
3-58		柞	（俗名）	毛詩疏／嘉祐補註本草／本草綱目／按
3-59		棫	未詳	

	巻次	項目名		引書
3-60		楛	未詳	
3-61		檉	（俗名）	昆蟲草木畧／本草綱目／按
3-62		椐	未詳	
3-63		槧	未詳	
3-64		柘	未詳	
3-65		梧桐	（俗名）	按
4-1	巻四	雎鳩	（俗名）	郭璞爾雅註／毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋歐陽公詩本義／明沈萬鈳詩經類考／按
4-2		黄鳥		宋鄭夾漈爾雅註／本草綱目／陸疏廣要／按
4-3		鵲	（俗名）	本草綱目／按
4-4		鳩		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／歐陽公詩本義／詩經說約／同上（詩經說約）
4-5		雀	（俗名）	
4-6		燕	（俗名）	嘉祐補註本草／清陳漠子秘傳花鏡／按
4-7		雉	（俗名）	按
4-8		鴈		唐顔師古急就篇註／嘉祐補註本草／按
4-9		烏	（俗名）	
4-10		鴻	（俗名）	按
4-11		鶉	（俗名）	
4-12		雞	（俗名）	
4-13		鳧	（俗名）	按
4-14		鴇	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／埤雅／明呉元化毛詩鳥獸草木攷
4-15		晨風	（俗名）	毛詩疏
4-16		鴞	（俗名）	爾雅疏／本草綱目
4-17		鳲鳩	未詳	
4-18		鵙	（俗名）	毛詩鳥獸草木攷
4-19		鴟鴞	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋呂東萊讀詩記／按
4-20		鸛	（俗名）	
4-21		鵻	（俗名）	爾雅翼
4-22		脊令		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋嚴粲詩緝／按
4-23		鴻雁	見前	毛傳／毛詩疏／按
4-24		隼	未詳	
4-25		鶴	（俗名）	
4-26		翬	未詳	
4-27		鳴鳩		詩經集傳／按
4-28		桑扈	（俗名）	本草綱目／按
4-29		鷽	（俗名）	毛詩疏
4-30		鶉		清王夢伯詩經廣大全
4-31		鳶	（俗名）	埤雅／邵武府志／按
4-32		鴛鴦		本草綱目／按
4-33		鷸	未詳	宋嚴粲詩緝／陸疏廣要

	巻次	項目名		引書
4-34		鶩	（俗名）	本草綱目
4-35		鷹	（俗名）	
4-36		鷺	（俗名）	
4-37		鳳凰	未詳	
4-38		梟		
4-39		鴟	（俗名）	鄭箋／詩緝／按
4-40		鷺	（俗名）	
4-41		桃蟲	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／詩緝／按
5-1	巻五	馬	（俗名）	
5-2		兕	未詳	
5-3		兔	（俗名）	晉張華博物志／清方以智通雅／清皖桐方氏物理小識
5-4		麟	未詳	
5-5		羔羊	（俗名）	毛傳
5-6		麝		本草圖經／按
5-7		鹿	（俗名）	
5-8		厖	（俗名）	詩緝
5-9		豝		詩緝
5-10		豵		同上（詩緝）
5-11		騶虞	未詳	
5-12		狐	（俗名）	
5-13		象	此方未有	
5-14		鼠	（俗名）	
5-15		牛	（俗名）	
5-16		虎	本邦未有此獸	
5-17		狼	（俗名）	
5-18		盧		毛傳／毛詩疏／本草綱目
5-19		貆		鄭箋
5-20		獫歇驕		毛傳／詩緝／按
5-21		貉	（俗名）	
5-22		狸	（俗名）	
5-23		豺		毛傳
5-24		魚		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
5-25		麀		毛傳
5-26		熊	（俗名）	
5-27		羆		爾雅疏
5-28		豺	（俗名）	
5-29		猱	（俗名）	毛傳／毛詩疏／按
5-30		豕	（俗名）	
5-31		貓	未詳	毛傳／按
5-32		貔	未詳	
5-33		赤豹	未詳	

	巻次	項目名		引書
5-34		黄羆		毛詩疏
6-1	巻六	魴魚	未詳	
6-2		鱣	未詳	
6-3		鮪	未詳	
6-4		鰥	未詳	
6-5		鱮	未詳	
6-6		鯉	（俗名）	
6-7		鱒	（俗名）	詩緝／宋鄭夾漈爾雅註／明李東璧本草綱目／按
6-8		鱨		唐陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
6-9		鯊	（俗名）	宋陸佃埤雅／按
6-10		鱧	（俗名）	明李東璧本草綱目／清王金孺詩經廣大全／寧波府志／按
6-11		鰋	（俗名）	
6-12		鼈	（俗名）	
6-13		龜	（俗名）	
6-14		貝	（俗名）	
6-15		鼉	未詳	
6-16		鰷	（俗名）	本草綱目／按
7-1	巻七	螽斯	（俗名）	唐孔穎毛詩疏／宋歐陽公詩本義／宋邢昺爾雅疏／鄭夾漈爾雅註／清方以智通雅／按
7-2		草蟲	（俗名）	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
7-3		阜螽	（俗名）	唐陳蔵器本草拾遺／按／宋歐陽公詩本義／按
7-4		蟷蠐		宋鄭夾漈爾雅註
7-5		蠦		鄭箋／宋鄭夾漈爾雅註
7-6		蒼蠅	（俗名）	
7-7		蟋蟀	（俗名）	草木鳥獸蟲魚疏
7-8		蜉蝣	未聞俗名	明毛晉陸疏廣要／按
7-9		蜩	（俗名）	宋嚴粲詩緝／昆蟲草木畧
7-10		莎雞	（俗名）	毛詩草木鳥蟲魚疏／宋丘光庭兼明書／明顧夢麟詩經說約／清王夢白詩經廣大全
7-11		蠋		毛傳／毛詩疏
7-12		伊威		毛詩草木鳥獸蟲魚疏
7-13		蠨蛸		毛詩草木鳥獸蟲魚疏
7-14		熠燿	（俗名）	毛傳／毛詩疏／按
7-15		虺	（俗名）	
7-16		蛇	（俗名）	
7-17		蜴	（俗名）	
7-18		螟蛉 蜾蠃		毛詩草木鳥蟲魚疏／宋嚴粲詩緝
7-19		蜮	未詳	
7-20		螟		
7-21		螣		
7-22		蟊		

	巻次	項目名		引書
7-23		賊		毛傳／鄭夾漈爾雅註
7-24		青蠅	（俗名）	
7-25		蠆		本草綱目／同上（本草綱目）
7-26		螗		爾雅疏
7-27		蠶	（俗名）	
7-28		蜂	（俗名）	
8-1	巻八	流離		詩經集傳／按
8-2		諼草		唐孔穎達毛詩疏／宋羅願爾雅翼
8-3		碩鼠		鄭箋／按
8-4		宵行		唐孔穎達毛詩疏／按
8-5		嘉魚		鄭箋／宋嚴粲詩緝／按
	附録	羅木		宋周公謹癸辛雜識續集／按